

【令和5年度実績】

1. 展示や各種企画を通じた大学の研究成果・学術資源の公開による社会貢献事業

「社会との共創」

No.06 (2)-4 「社会とともにある大学」としての社会連携の強化, No.07 (2)-5 戦略的ファンドレイジングの展開と支援者とのネットワーク強化, No.30 (2)-3 文化・学術資源の発信, No.44 (1)-2 東北大学ブランドを高めるための戦略的広報の強化

実績報告

1) 新型コロナウイルス感染症が5類に移行し、行動指針も通常になったことから、センターの展示公開施設は、通常の開館を実施することとなった。開館にあたっては、基本的な感染防止対策の呼びかけを、継続して実施した。

センターとして、展示公開施設に対する文化庁の補助金に申請し補助を得て、新型コロナウイルス感染症対策を強化してきた。これらの補助金を活用して、オンライン企画のための機材を導入し、オンライン企画や YouTube を利用した企画を推進してきた。通常の開館に移行した後も、これらの企画を継続して推進している。

総合学術博物館では、YouTube 公式チャンネルを開設(2021年6月より)後、標本館内の展示関係動画や仙台の地質に関する動画を定期的に配信してきた。2024年3月31日までに34本配信済み。また、博物館公式 X(旧 Twitter)も着実にフォロワー数が増加しており、2024年3月31日までに838ツイート、2,306フォロワーを超えている。これらの取り組みにより、総合学術博物館のホームページ訪問者数が昨年度でコロナ前の約1.6倍の311,759件となり、今年度はさらに増加して419,141件に達した。

植物園では、昨年度の文化庁補助金で購入した機材を活用し、植物園の YouTube 公式チャンネルを開設した。植物園の自然や園内の見所を紹介する動画を順次アップしている。

史料館では、コロナ禍においてキャンパスに来られない学生や同窓生のために、東北大学公式サイト上に、東北大学キャンパスガイドを開設すると共に、コロナ禍のキャンパス定点観測撮影を災害研とともに継続して実施したほか、法人文書移管作業に際し、COVID-19に関する東北大学対応記録に重点を置くなどアーカイブ事業を展開した。

2) 女子大生誕生110周年文系女子大生100周年記念事業の一環として、学内関係部局と連携して、記念展示をはじめとする企画を実施した。史料館では専任教員が記念事業を担当する総長特別補佐として女子大生誕生110周年文系女子大生100周年記念に貢献した。

史料館では、女子大生誕生110周年文系女子大生100周年記念展示として「日本初の女子大生 黒田チカから一世紀のあゆみ」の川内萩ホール(9/30)、青葉山コモンズでの巡回展(10/28)を実施するとともに、DEI推進センターと共催し、同企画展示を史料館で開催した(10/7~12/22)。来場者は2972名となり、直近5年間で最大の来館者数となった。(図1)この史料館の展示を中核として、連携した展示を川内南キャンパス、青葉山北キャンパスで実施した。川内南キャンパスではセンターと文系4研究科の共催、青葉山北キャンパスではセンターと理学研究科の共催として開催し、いずれもDEI推進センターの後援を得た。川内南キャンパスは、文科系総合講義棟ホールを会場として、パネル展示「ここから、未来に、駆けていく 文系女子大生誕生から

100年。」(9/29～11/6)を実施した。青葉山北キャンパスでは、女子大生誕生110年記念展示「科学者としての黒田チカと最初の女子大生達」を自然史標本館メイン展示室2階において実施した(9/30～12/22)。(図2)

3) 総合学術博物館では、SNSやウェブサイトを用いた宣伝活動、常設展の改装および新規展示、来館者向けイベントを連続して実施した。その結果、今年度の入館者数は18,370人(2024年3月31日現在)に達し、設立以来、過去最高の入館者数を記録した。昨年度に開設したミニ展示コーナーでは、「宮城県内で採れる鉱物 Part 6 川崎町安達・カミングトン閃石、堇青石」を実施し、メイン展示室の地球史の展示背景パネルについては、「先カンブリア時代」から「デボン紀」までの5枚を展示物にあわせた復元画に更新した。さらに日本最大級のアンモナイト化石の展示を新設した。また、小中学生を対象とした石ガチャ(岩石・鉱物とその解説を入れたガチャガチャ: 6/27～9/2、10/3～10/9、12/19～1/13、3/19～4/7)やクイズイベント(3/7～4/9、5/16～6/25、10/11～11/12)を行い、好評を博した。さらに博物館開館25周年記念ウィークを開催し(10/3～10/9)、来館者に記念品(オリジナルクリアファイル)を贈呈した。

主催事業としては、「川内地域の地質の表象」(会期:2023年5月17日～6月18日、会場:国際センター駅青葉の風テラス1階、細萱航平氏、都市デザインワークスとの共催)を実施し、展示の一環として記念ツアー「地層巡りと仙台の古環境」を5月28日に国際センター駅周辺でおこなった(参加者19名)。

4) 史料館では、周年事業として実施した上記展示を含め、常設展示・企画展示合わせて16件の展示を展開した。北京魯迅博物館との共催パネル展示「北京時代の魯迅 西暦1912年-1926年」を通じた国際共同企画展を展開したほか、災害科学国際研究所とともに関東大震災100周年を期として「仙台に残されていた関東大震災の記録:100年の時を経て特別公」展をおこなうなど、内外への発信力強化を進めた。

5) 史料館では、旧制二高同窓組織と連携した取り組みを行い、明善寮・旧制二高関係者からなる新規同窓組織:蜂萩会の萩友会と連携して寮歌祭顕彰イベントを実施したほか、旧雨宮キャンパスでの史跡整備を進めた。

 [図1 女子学生誕生史料館記念展示チラシ.pdf](#),  [図2 女子学生誕生センター展示チラシ.pdf](#)

2. 大学の有する自然環境・歴史的資源の保全と活用を通じた社会連携の強化

「社会との共創」

No.06(2)-4「社会とともにある大学」としての社会連携の強化, No.44(1)-2 東北大学ブランドを高めるための戦略的広報の強化

実績報告

1) センターでは本部総務企画部と連携し、総長裁量経費の措置を受けて、「キャンパス資源活用による開かれた大学」事業を実施した。

○デジタルデータとリンクしたキャンパス資源の可視化

片平地区の令和3年度に登録された登録有形文化財8件への銘板を設置し、WEBページ掲載の関連コンテンツ表示と連携する事業を、2022年度に引き継ぎ実施した。片平キャンパスにある樹木に、ウェブ情報とリンクしたQRコード付きの説明ラベルを追加して設置した。川内キャンパス

や千貫沢などの樹木に、ウェブ情報とリンクした QR コード付きの説明ラベルを設置し可視化を図った。

○片平キャンパスツアー

旧金研 10 号館(放送大学として2・3階使用)1階に 2022 年度に開設した、東北大学の歴史、学術成果を紹介する「東北大学ギャラリー ひすとリア」を拠点として、以下の各種のキャンパスツアーを実施した。春と秋の樹木ツアーでは、ポッケの森(障がい者就労支援施設)提供の茶菓子で懇談の場を設けた。

学生向け片平キャンパスツアー(4/2、4/4)、片平春の樹木ツアー(5/20)、登録有形文化財を巡るツアー(6/7、9/30)、放送大学同窓会ツアー(8/22)、片平秋の樹木ツアー(11/18)

○西澤記念資料室の公開

西澤潤一記念資料室(旧半導体研究所1階)の展示を増設し、特別一般公開を実施した(9月30日～11月2日)。(図3)

○川内千貫沢遊歩道整備と学内外有志ボランティア組織

学内外の人材によるキャンパス資源活用の枠組み形成として、川内南キャンパスの千貫沢遊歩道の清掃活動を、学内外有志ボランティアによって実施した。

2) 史料館では、片平キャンパスの「東北大学ギャラリーひすとリア」、「魯迅ラウンジ」「魯迅の階段教室」「史料館本館」の4つの展示スペースの見学対応を担い、各種登録有形文化財の展示機能を強化、キャンパスツアーのルート構築とともに登録有形文化財との一体的な観覧性を高め、学内歴史的建造物のアウトリーチ体制を強化した。また新入生に向けた片平キャンパスツアーの取り組み(4/2、4/4)、SMMA(せんだい・みやぎミュージアムアライアンス)、東北学院大学と協力しての見験楽学ツアーの実施(3/2)など、校友アイデンティティの創出に積極的に寄与した。

3) 植物園では、青葉山公園を中心に開催される第40回全国都市緑化仙台フェア(2023年4月26日～6月18日)(主催: 仙台市・公益財団法人都市緑化機構)の連携会場として協力した。開催期間中の4月29日には仙臺緑彩館にて教員3名が公開講演会『天然記念物「青葉山」の自然と歴史』(参加者35名)、5月4日には午前と午後2回にわたり教員によるウォーキングツアー『天然記念物「青葉山」の新緑を楽しむ』(参加者40名)を実施した。(図4)





4) 植物園では、天然記念物再生事業(国庫補助事業、2019年度より5年間)を実施し、天然記念物「青葉山」におけるナラ枯れ抑制と安全確保のため、最終年度の各種事業を実施し、その保全に努めた。

5) 植物園では、植物標本庫(津田記念館)設立当初の寄付金をその維持管理費に充ててきたが、それが枯渇したため、世界に開かれた植物標本庫として持続的な体制構築を目指し、クラウドファンディング「100年間受け継がれてきた植物標本を次世代へ | 東北大学植物標本庫」を2023年9月10日～2023年11月9日に実施した。植物関係の研究者、本学同窓生、植物園のファン層、さらにNHKの朝ドラの影響もあり、多くの一般の方も含む928名から支援が寄せられ、総額は17,754,000円に達し、プロジェクトは成功した。(図5)

6) 植物園では、文学研究科と共催で、市民オープンキャンパス「紅葉の賀」(11月3日)を開催した。当日は、野点、俳句会、生花展示、弦楽四重奏、ガイドツアーが実施され、参加者は241名であった。また、昼食時間帯にポッケの森(障がい者就労支援施設)にキッチンカーの出店を依頼した。(図6)

7) 市民向け普及講演会・展示の実施

市民向けの仙台・宮城の大地の歴史に関する普及講演を「地底の森ミュージアム(9/23)」「蔵王ジオパーク協議会主催蔵王の達人講座(9/30)」「仙台明治青年大学(10/11)」「広瀬市民センター(2/3)」「仙台市環境局たまきさんサロン(3/31 予定)」などで行った。また、イオン利府店と共催し、VRを用いた展示「VR 恐竜と宮城の化石展」をイオンモール新利府南館で実施した(8/15~16)。

 [図3 西澤資料室特別一般公開チラシ.pdf](#),  [図4 緑化フェア公式ガイドブック抜粋.pdf](#),  [図5 植物園クラウドファンディング案内.pdf](#),  [図6 紅葉の賀チラシ.pdf](#)

3. 独自性を活かした復興支援・震災記録事業の推進・展開

「社会との共創」

No.10 (1)-3 先進的 ICT を活用した教育基盤の構築, No.26 (1)-1 科学的知見に基づく国際貢献と廃炉の推進を通じた地域への貢献

実績報告

1) センターでは、人間文化研究機構が中心となり東北大学・神戸大学との3者で実施される歴史文化資料保全ネットワーク事業の第2期事業(2022~2026年度)に、第1期事業に引き続き参加し、歴史文化資料の防災のための、教育プログラム開発を担当している。昨年度に引き続き、関係機関との連携体制構築や、博物館等の防災対策の現状調査を実施した。

2) 総合学術博物館では、東日本大震災の震災遺構の3次元デジタルアーカイブデータを WEB 配信し、オンラインで利用する方法の検討と試行を行った。高分解能X線CT設備(学内共同利用)を活用し、学内外の機関の多様な分野の研究者との共同研究を継続して実施した。

2024年1月26日に、南三陸を化石で盛り上げる会「Hookes」主催のシンポジウム(於:南三陸町 平成の森アリーナ)「南三陸町における『新種の化石発見の可能性』」において、協力研究員が「南三陸には新種の化石が眠っている!!!」と題して講演し、約60名の参加者に対して南三陸の地質資源に関する普及活動を行った。

3) 史料館では、2023年度に開館した仙台市公文書館の運営検討会議に史料館教員が座長として関わることを通じて、官学連携した東日本大震災と公文書管理に関する記録の収集選別基準の策定を進めた。さらに史料館教員が山形県公文書等管理委員会の職務代理者の立場から、山形県公文書センターの運営にも参画し、東北における新たなアーカイブ機能について広域的に関与することで、地域自治体における震災公文書の保存継承に主導的な役割を果たした。

4. 公文書管理による大学運営への貢献

「業務運営の改善等」

No.44 (1)-2 東北大学ブランドを高めるための戦略的広報の強化, No.46 (1)-2 全学 DX によるデジタル・キャンパスの推進

実績報告

1) 本部事務機構の協力の下、現用・非現用のライフサイクルに基づく適切な公文書管理と評価選別・移管を実施し、歴史公文書の保全に努めた結果、本年度は国際標準 6%を越える移管率 10%を達成した。

2) 史料館では、第 22 代総長期の 17 名の執行部に関するデータベース化を進めると共に、理事事績ヒアリングを実施し、本学の歴史継承のためのアーカイブ化を実施した。さらに日本初の女子大生のアーカイブとして国内最大級の「黒田チカ資料」を整理・公開し、東北大学における学術資源のプレゼンスを高めた。

3) 史料館では、2022 年度に設置された東日本の国立大学で初となるアーキビストの教育養成プログラム「認証アーキビスト養成コース」の設置において、文学研究科、法学研究科、災害科学国際研究所、学際科学フロンティア研究所と連携し、主体的な役割を担い、同コースの運営をおこなった。また 2024 年度から新たに国の認定が開始される、准認証アーキビスト制度に同プログラムが対応出来るコースとなるよう国立公文書館と折衝し、その結果、認証アーキビスト養成コースのコース修了者が、准認証アーキビストの認定を受けることが可能となった。

5. 先端技術を活用した学術資源利用の促進

「研究」

No.18 (1)-1 自由な発想に基づく基礎研究の推進および新興・分野融合研究の開拓, No.28 (2)-1 国際共同利用・共同研究拠点及び共同利用・共同研究拠点の機能強化

実績報告

1) 総合学術博物館では、東日本大震災の震災遺構の 3次元デジタルアーカイブデータを WEB 配信し、オンラインで利用する方法の検討と試行を行った。高分解能 X線 CT 設備 (学内共同利用) を活用し、学内外の機関の多様な分野の研究者との共同研究を継続して実施した。

2) 史料館では、東北大学の人文・社会科学研究を国際展開し、卓越した研究を進展させるための、統合日本学センターの設置に積極的に関与し、史料館教員は副センター長を務めるとともに、デジタルアーカイブユニット長を兼務し、学術資源研究公開センターを中心とした学内の学術資源のデジタル化と国際共同研究の枠組みの構築を進めた。(図 7)

3) 史料館では、附属図書館と連携して「総合知デジタルアーカイブ」の仕様構築に寄与した。総合知デジタルアーカイブは学内のデジタル化された学術資源を蓄積・統合、本学のアーカイブポータルとして公開し、学術資源の国際発信を目指すもので、最新のソフトウェア技術や国際的な規格に準拠し、国際的に発信・活用できる機能を備えた本学初の本格的なデジタルアーカイブシステム計画となっている。(図 8)

4) ヨーロッパで先進的なデジタル管理を進める欧州委員会とタイアップし、これからの国内におけるデジタル記録管理を研究する「紙から電子へ: ボーンデジタル記録の管理－欧州委員会の方針と管理システム－(From Paper to Digital: Managing born-digital records – European Commission's records and archives policy and management system－)」(2/23)を企画した。(図 9)

4) 植物園本園の天然記念物指定範囲は、環境省のモニタリングサイト 1000 事業の準コアサイトとなっており、今年度も月1回の植生概況調査、陸生鳥類調査、甲虫調査を実施した。これらの成果の一部は、環境省モニタリングサイト 1000 の HP (<http://www.biodic.go.jp/moni1000/index.html>) で随時発信されている。

5) 植物園では標本庫に収蔵されている 14000 件のさく葉標本のデータを、国立科学博物館が運営する S-net(サイエンスミュージアムネット、<http://science-net.kahaku.go.jp>) を介して、GBIF(地球規模生物多様性情報機構、<https://www.gbif.org>) へ提供した。GBIF は、自然史標本データおよび観察データを中心に、世界の生物多様性情報を共有し、誰でも自由に利用できる仕組みを構築することを目指した取り組みである。これまで国内の博物館・研究機関 104 機関が自然史標本情報を提供しているが(575 万件:2020 年 10 月現在)、東北大学から同機関への標本データの提供は一昨年度に開始され、今年度は、昨年(15000 件)とほぼ同程度のデータを提供した。

 [図 7 統合日本学センター概要.pdf](#),  [図 8 総合知デジタルアーカイブ概要.pdf](#),  [図 9 紙から電子へ講演会チラシ.pdf](#)

6. 教員の研究時間確保に係る取組

「教員の研究時間確保」

No.46 (1)-2 全学 DX によるデジタル・キャンパスの推進

実績報告

センターを構成する総合学術博物館、植物園、史料館の各組織では、各キャンパスに分散しているため、対面で行う必要の無い会議・打ち合わせは基本的にオンラインで実施している。センター3施設間での会議・打合せも基本的にオンラインで実施している。このことによって教員の移動負担軽減がはかられており、研究時間確保につながっている。

史料館は、必要に応じて教員に実務業務が入らない研修日設定を行い運用しており、研究時間の確保に努めている。